

連鎖反応

中村真一郎



集英社

D08336

連鎖反応

定価二二〇〇円

一九七八年一月一〇日 初版印刷
一九七八年二月二五日 初版発行

著 者 中村真一郎

発行者 堀内末男

発行者 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
電話 二三〇一六三六一（出版部）
二三〇一六七一（販売部）

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止。乱丁、落丁本はお取り替えます。

© S. Nakamura Printed in Japan 1978
0093-772124-3041

中村真一郎
連鎖反応
目次

第一章 飯田家の平和な朝食

7

第二章 過去の出現

30

第三章 自動車と廊下

54

第四章 生活の断層

78

第五章 深夜の思想

101

第六章 運命の悪意

125

第七章 姉弟の出会い

150

第八章 絹子の告白

175

第九章 妻の孤独な戦い

200

終章 葬式の前夜

226

装幀 中島かほる

連鎖反応

第一章 飯田家の平和な朝食

三月末の或る晴れた日曜日の午前、飯田猪三は遅い朝食の仕度をしていた。

朝食といっても、飯田家のそれは長年の習慣の「大陸風」という奴で、パンとコーヒーだけで済みます。時には細君がスクランブルと云う、卵をフライパンの上で掻き交ぜたものを作るか、ベーコンに目玉焼きを添えたのをやってみるが、猪三はそれでも胃がもたれて、会社で午前中不安な気分になって過すことになるというので、結局、この最も簡単な「大陸風」に戻ってしまう。

——「大陸風」と云う言葉は、戦前の猪三が学生時代の頃は、専ら満蒙あたりのものを指すのと決っていたが、この飯田家の「大陸」とは、ヨーロッパのことで、「大陸風」というのは「英国流」でないと言う意味である。猪三は会社の同僚で欧米を廻ってきた男から、向うの朝食の講釈を聴かされて、学生時代のアパート暮らし以来の自分の単純な朝食が、フランスあたりのそれと偶然、一致していることを知ったわけである。その新知識を早速、翌朝、食卓で披露すると、細君の御園は

それが気に入って、機会がある毎に、「うちでは朝は大陸風ですの」などと云い触らしている。尤も猪三自身もその同僚の解説が果して彼の地の実情に合っているのかどうか、本気で調べて見たわけではない。だから、昔から正確な知識と云うことに拘泥する性質の猪三は、細君が他人に「大陸風」などと口にする場面に立ち合うと、幾分、てれくさくなるのだが、そうかと云って、我が家の朝食を他所で吹聴するのはやめなさい、とは細君に注意できない。

もし注意すれば、細君は「私がまた虚栄心が強いと云いたいんでしょう」などと反撃するだろうし、食欲の旺盛な御園はそれを好機に、朝食をもっと豊富な「英国流」か「日本流」に切り換えたいものでもない。だから猪三は家庭の平和と、彼自身の胃袋の平安とのために、自分の羞恥は犠牲にすることにしていた。

そうして、その程度の犠牲は二十年に亘る結婚生活において、数えきれないくらいあったし、そしてそれにもう慣れていた。——いや、もし、時々、そうした精神や感覚への抵抗を妻から与えられないと、家庭らしい気がしなくなってしまうのかも知れない。彼も人並に酒に酔った時など、細君の悪口を同僚の前で口にしたりしてみるが、それが他人にはのろけの一種に聞えるくらいである。

彼の古い友人の須藤は、だから「おまえは細君の尻に敷かれていることで平和なんだ。もし女房の尻の圧力がなくなったら、却って毎日が不安で仕方なくなるだろう」と、面と向って厭味を云ったことがある。

猪三は硝子戸越しに、熱いほど陽のよく射しこんで来る板敷きの廊下で、卓のうえのパン焼き器

に、薄く切って売っているパンを抛りこみ、玄關脇の牛乳箱から、先程、齒をみがく序でに、庭下駄をつっかけて取りに行つて来た、やはり陽を受けて暖かくなつていた、二本の牛乳壺を立て、それから台所へ入って行くと、細君の美容食のトマト・ジュースを冷蔵庫から取り出して罐を切った。コーヒ―は既にポットのなかで湯氣を立てて唸っている。後は細君を起すだけだ。

猪三は寢室へ入って行くと、容赦なくカーテンを開け放つた。半徹夜で未だ睡眠の絶頂にあるらしい御園は、皺の目立つ素顔を醜く歪めると、無意識のうちに布団を被ろうとした。その時、猪三は妙なことを想い出した。——ここから歩いて行ける距離のアパートに独り住いしている、例の古い友人の小説家の須藤が、この間、ぶらりとやつて来て上りこむと、フランスの小説のなかで、恋人が眠っている間だけは、その女を自分のものにしていう安心感を持つ男が出てくる、と云う話をしたのだった。猪三自身も、普段、油断のない化粧をして皺ひとつない若々しい艶のいい御園の顔を眺めている時よりも、こうして血色の悪い、やがてなるであろう老婆の表情を予感せしめる、皺の浮き出た醜い彼女の顔を盗み見た時の方が、氣が楽なのだと云うことに、今、氣が付いた。それは或いは彼自身も、早く定年になって隠居の境涯に滑りこんでしまいたいと云う、つまり未だ何かこの人生でしなければならぬという強迫観念から早く自由になつてしまいたいと云う、潜在的な願望の無意識的なうごめきのためかも知れなかった。が、そういう自分になるためには、未だ十年近く待たなければならぬし、しかも最近の社会情勢では、どうやら彼の会社も、定年が五年くらいは延長される形勢だった。現に、昨日も午前中の定例会議の席上で、御園の兄の南条専務が、調査部長たる彼に、同種の他社の定年制度について研究しておくように指示したものだっ

た。同時に御園の妹婿の労務部長の田沢も、その件について組合側の意向を打診しておくように命じられたのだった。

しかし、田沢のような野心家とは異って、猪三はいい加減で会社勤めをやめて楽になりたいと云うことだけを（四十歳の頃にひどい胃病をやったからには特に）潜かに願いつづけている。子供のない二人暮しで、細君の実家の一族は隆々とやっているのだから、他の同僚とは異って、猪三は定年後の生活の心配は先ずあるまい、と高をくくっていた。

そして、そのための唯一の必要条件は御園が彼よりも先に死んでしまわないことである。この女さえ生きていれば、自分たち夫婦が世間体を保つ程度の生活は、必ず実家から確保してくれる。彼は細君の後について、黙って頭を下げていさえすれば、それは何とか実現するだろう。

となれば、彼は御園があまり早く老いこんで、彼女の持ち前の生活力の現れである、あの強烈な虚栄心が色褪せてしまうような状態が訪れるのを願うのも、危険なことだった。

この女には、まだまだ元気でもらわなくてはならない。そのためには不眠症は最大の敵であり、そしてその敵の原因となる朝寝坊は厳禁である。

猪三はそういう結論に達すると、手荒く布団を引き剥いだ。御園は薄眼を開けると、覗きこんでいる亭主の顔を睨んだ。

「さあ、起きないと、今夜、また眠れないよ。起きて、濃いコーヒーを飲むんだ。」

猪三は快活な調子でそう呼び掛けると、細君の頬を、二三回平手で敲いた。それから、汗ばんだ額に軽い接吻を与えると、急いで台所へ逃げこんだ。

こうした軽薄に近い快活さと云うものは、猪三が結婚生活の間に習得した家庭平和の技術であった。彼はこの快活さによって、細君の不平不満を、それが人生においては問題にならない軽い事柄に過ぎないのだと思わせてしまふのだった。御園は亭主の妙に若々しい、この幾分おどけた態度によって、大概の場合、機鋒を殺^そがれてしまふ。中身はすっかり老けこんでしまっている癖に、この人はどうして見掛けだけこんなに若いのだろう、と御園はそんな疑問に捉えられると、肝腎の怒りが行方不明となつて行く。今も半睡半醒の間で、この拍子抜けの氣持を彼女は味わつた。昨夜——と云つてももう、窓の外の空氣は暁を予告する、あの静まりきつた深い闇に包まれていたが、一晩中、悪戦苦闘して書き上げた身上相談の回答を、机のうえに揃えたと、御園はどうにも昂ぶっている氣持の始末に困つて、猪三の寢台に久し振りに滑りこんだのだった。ところがこの若年寄りは、材木でも押しのけるようにして、彼女の身体を突き戻したのだ。それが数時間後の今は、あんなに身輕に台所を出たり入ったりしている。そうして新婚の夫のように、額に接吻などを投げ与えたりして……

御園は偏頭痛のする頭を意識しながら、派手なガウンを纏^{まと}つて廊下へ出て来た。強烈な午前の陽光の光りが、彼女の網膜を突き刺した。

「さあ、これをぐつとひと息に飲んで、催眠薬の残りの作用を身体から追い出すんだね。」

と、夫の猪三は相変らず明るい声で呼びかけながら、コーヒー・カップを卓越しに差し出した。

「何だ、私が昨夜、寝る時に、あなた起きてらしたの？」

と、御園はガウンの腰帶を締めながら、不平そうな調子で抗議した。

「白河夜船さ。午前様の君にはつき合えないよ。」

と、猪三は答え、それから突然、細君の抗議の意味を理解した。——今朝の爽快な気分のなかで、彼は全く忘れていたが、今日の明方近く、彼はこの中年肥りの女の身体が傍らに滑りこんでくるのを押し戻したのだった。しかし、それは数年前の彼の胃の手術以後には、半ば習慣となり了えている事柄であって、昨夜に限って彼女がそのことに傷つくと言うのは、ありそうもないことだった。現に彼の方は何の気まずさも感じなかったから、こうして今迄、そのことは想い出しさえしなかったのだ。が、催眠薬のことを、つい口にしてしまったことで、あの時、彼女が彼の寝台から仕方なく滑り出ると、その薬を鏡台のまえて、シュミーズひとつのしどけない恰好で飲んでいたのを、彼が観察していたと云うことを、告白した結果になった。細君としては、亭主が眼が開かないくらい疲労していて、無意識の裡に彼女を拒否したのなら許せるが、眼覚めていて、知っていて彼女を押しつけたことが判っては、心が安らかでなくなったのだ。長い結婚生活の果の彼女は必ずしも夫の抱擁を望んでいたのではない。ひと晩かかって、やっと仕上げた原稿のあとの疲れて昂奮した気分を、夫が優しく、言葉ででもいいから慰め静めてくれることを願っていたのだ。それを知っていて、しかし猪三は「長い結婚生活の果」の今は、そうした労力さえ、面倒くさいものに思っていたのだ。そして、その夫の面倒がりに気付いた細君は、化粧前の寝ぶくれた顔を、日光に直射させながら醜く歪めている。

猪三は大急ぎで細君の気分を、自分に対する不満から外らすことにした。

「今度の身上相談は、どんな問題なんだい？　うまく出来たかい。」

御園は若い頃から、或る新聞社の婦人欄の主催する読者サークルに属していて、そのために「家庭問題」に関する彼女の文章が、この一年ほどの間に、二三度、その大新聞の特輯記事のなかで活字になった。それが或る女性週刊誌の編集者の眼にとまって、今月のはじめから、身上相談欄を受け持たされることになったのだった。

それは単調で変化のない夫婦だけの暮しに精力を持て余していた御園にとっては、大きな変化だった。彼女は久し振りに、精神の緊張から来る心の昂揚を感じ、毎日が新鮮だった。鏡の前に坐ると、肌艶が戻ってくるのが判った。彼女は自分の精神と肉体との若返りに、夫がいつ気付いてくれるかと、潜かに期待していた。しかし、今迄のところでは猪三の方は、この新しい妻の状態を、専ら彼女の不眠症に悪影響を与えるのではないかと云う危惧の形でだけ受けとめているようだった。昨夜、彼女を拒否したのも、或いは徹夜の彼女の体力をそれ以上、消耗させてはいけなと云う、夫らしい小心さからかも知れない。

御園は毎週、彼女に与えられる新しい人生上の宿題に全心を投入した。彼女にとって今まで閉ざされていた他人の家庭と云うものが、突然に屋根を剥がれて、その裸の生活が眼のまえにむきだしになる、と云うのは驚くべき鮮烈な経験だった。小説などを読んでいても、従来と異って、その物語のなかの事件が自分と直接の利害関係があるように感じられ、人物たちが彼女に向って身上の解決を要望しているように思われるのだった。——つい先週も、ある老人の後妻となっていた若妻が、若い男と恋愛をはじめ、その男と結婚したいのだが、年老いた夫が離婚を承諾しないので苦しんでいるという訴えに対して、御園はその若妻の浮いた気持ちに不快になり、寛大な夫を弁護し、若

い誘惑者と縁を切るように忠告する回答を書いたのだった。その原稿を受けとりに来た若い編集者は、この回答を膝のうえで翻していたが、彼女の意見が「保守的」に過ぎて、自分たちの週刊誌の読者である若い女性たちの不人気を買うのではないか、と抗議した。そして、ひと晩でもう一度、回答を書き変えてほしいと云って帰って行った。御園は夫の会社に電話して、退社したら真直ぐに家に帰って来てほしいと猪三に頼んだ。そうして、夕食の卓上にこの回答を差し出した。

ビールのコップを片手に、この「保守的」な原稿の内容に眼を通した猪三は、「トルストイなら、こうは考えなかったろうな」と云った。これは『アンナ・カレニナ』と同じケースだ、と昔の文学青年だった猪三は説明した。それで夕食が済むと直ぐ御園は、応接間の書棚から世界文学全集の一冊を引き出して、この前世紀の傑作を二十年振りで読み返しはじめた。そして、自分が若き近衛将校ウロンスキーにひどく反感を持ち、老いたる宮廷官僚カレーニンに熱い同情を抱きはじめているのに気が付いた。絵空事のなかでは、モスコウの駅頭での美男美女の出会いが胸の弾むような愉しい情景かも知れない。(少女時代に猪三と恋愛をしていた頃の御園は、本当にこの場面に人生の最も美しい夢を感じて酔いしれたものだった。)しかし、現実の生活問題としては、妻がそのような形で他所の男に気を取られたり、若い男が無反省に人妻に恋心を抱くことは、現在の御園の生活感覚からしては許されないのだ。そうした古典的傑作といえども、未だ人生経験の貧弱な若い娘などには、とんでもない悪影響を与えかねないものだ、という感想を御園は抱いた。一度、そうした意見を、この『アンナ・カレニナ』を例にして書いてみよう、とも彼女は思った。彼女は机のうえのメモ帳に、細かい字でその想い付きを記した。——一時的な突発的な恋心と云うようなもので、家